

めだか談義

メダカ発世の中つれづれの記 2019・10・22

3年前の夏、山田さんからこんな話が持ち込まれました。「酒米を川西屋酒造と井上酒造が引き受けてくれることになった。村田さん、そのお酒の銘柄のネーミングとラベルのデザインを」という話。コピーライターの私にとっては願ってもない話。さっそく、二つの酒蔵の社長さんにお会いして、酒造りへの熱い思いをお伺いしました。試行錯誤を繰り返して最終的に川西屋さんは「桑原」、井上酒造さんは「左岸」とどちらも地域に根差した銘柄で決まるのですが、川西屋さんについては、関西や九州にも販路が広がりつつあり、「桑原」では知名度がない、だから「丹澤山・桑原」にしたいという注文が出ました。川西屋さんの品質担当の方いわく、「素晴らしいお酒が出来た」と大変な自信。それでも社長いわく「その分費用もかかったよ」とのこと。結局、川西屋さんとの取引は1年で終わってしまうので、この年の「丹澤山・桑原」を呑めた方はとても幸運。さて、「左岸」の銘柄についての話です。ある日のこと、桑原を歩いているときに「酒匂川左岸土地改良区」と書かれた車が停車していました。その時「ああ、左岸ていいなあ、響きもいいし」とこれを提案しようとして決めてはいたわけです。そんな折、自分の書棚の奥の方に「左岸より」という1冊の本が目にとまりました。すっかりその存在を忘れていたのですが、倉本聰の30年近く前のエッセイ集でした。パラパラとめくってゾクゾクしました。序にこうあります。「昔、男たちは土の匂いがした 昔、男たちは汗の匂いがした 昔、男たちは枯草の匂いがした 昔、男たちは焚火の匂いがした (中略) 今、男たちは若くして老成し コロンの匂いをさせ 自分の意見を持たず 筋力を失い 汗を嫌悪し〜」そして、こう述べます。「滔々(とうとう)たる流れがひとつ。それを右岸より眺める者と、左岸より見る者、二つの部族が存在する。右岸に立つ者は批評家である。左岸に立つ者は創る側である。」「黙々とやっとなるもと、やりもせんでああだこうだと能書きばかりたれる奴」「最近ではアレだもんね、右岸に住む奴やたら多くて、左岸のほうは、アレ、過疎ですもんね」 単純に、酒匂川左岸の米という意味で「左岸」を提案しよう思っていた私に太い背骨をガツンと打ちこむエッセイでした。それというの、このめだか米の酒米を生産する「おだわら農人めだかの郷」の皆さんと何度もお会いする中でいつも感じていたのは、なんと静かな人たちなんだろうということでした。黙して語らずというか、休耕田を引き受けて耕作を行うという大変な労働を背負っているにも関わらず、それをおくびにも出さず、日焼けしたシワの多い顔で、とにかく自然体。倉本聰のいう「左岸の人そのもの」。この強い思いを井上酒造さんの社長と山田さんだけには伝えましたが、それはオモテには出す必要はなく、酒匂川の左岸、という意味で充分なのですが、実は、私はこんな強い思いを隠し持つこととなりました。以下、余談。パリで生活をしたことがある井上酒造の社長は「左岸」と提案したとき、「フランソワーズ・サガン」と言いました(笑)そこで私の連想も膨らんで、「パリの左岸地区」というのは良く聞くなあ、セーヌ川の左岸は芸術家や学生街があつて、アタマを使う地区、一方、右岸地区はシャンゼリゼなどおカネを使う地区と揶揄されたりして、なにやら左岸のイメージのほうがよくさうだ、井上社長いわく、サンローランの左岸の店はブランドですよ、とも。そんな社長の遊び心も尊重して、ラベルには、SAGANという英文と rive gauche という仏文(リヴゴーシュ・左岸の意、サンローラン・リヴゴーシュは有名なブランド)がこっそり表記されています。収穫の酒米「吟のさと」(山田錦のDNAを持つ)はこの秋も約3600kgが収められる予定。720ml(4合瓶)2200本に相当する量となります。ハルネの藤木屋、真中病院裏の箱根屋酒店にはまず置いてあるので、純米吟醸「左岸」をお試しあれ。

純米吟醸「左岸」の名前に込めた思い。